

当報告の内容は、それぞれの著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

「アフリカ諸語の情報構造と言語形式の類型論的研究」

(平成25年度第2回研究会)

日時：平成25年7月7日（日曜日）午前10時30分より午後5時30分

場所：A A研304室

報告者：

Anyanwu, Rose-Juliet（A A研所員）

‘Transitivity and information structure (especially focus) in West African Benue-Congo languages- Igbo, Kana, Yukuben, Kuteb, Hone’

長渡陽一（東京外国語大学講師）

「アラビア語の子音情報量」

若狭基道（A A研共同研究員）

「n音の特殊性」

セイフ・ラナ、松尾愛（東京外国語大学大学院）

「アラビア語の派生形第Ⅶ形と第Ⅷ形の使い分け—コーランテキストを対象とした分析から—」

仲尾周一郎（A A研共同研究員）

「ジュバ・アラビア語中層話体を記述する」

榮谷温子（慶応義塾大学講師）

「古典アラビア語の事柄の代名詞」

ラトクリフ、ロバート（東京外国語大学）

「中野 ‘Hobyot vocabulary’ について」

第2回研究会は、中野 ‘Hobyot vocabulary’ の出版を記念して、故中野先生をしのびセム語研究会と共催で行われた。研究発表の詳細は別紙を参照のこと。外部からの出席者もあり活発な議論が行われた。とくに若い研究者になろうとする人たちの熱心な研究発表と議論が印象的であった。

n 音の特殊性

若狭基道（AA研共同研究員）

n 音は世界の諸言語を通じて特に珍しい音ではない。エチオピア南西部のウォライタ語（アフロアジア語族、オモ語派）の場合も同様で、n 音を有するのは勿論、n 音の出現頻度も決して低くはない。

だが、ウォライタ語では n 音で始まる語（語彙的形態素と言ってもよい）の数は有意に少なく、しかもその中には外来語やオノマトペに由来すると思われるものも多い。

事情はウォライタ語の近隣で話されているカンバタ語（アフロアジア語族、クシ語派）でも同様である。但し、同じアフロアジア語族でもセム諸語の場合はこうした制限は特に見られない。その一方で系統的には無関係な日本語でもナ行で始まる語が少ないのは気になる。

以上の分布に関する偏りは単なる偶然かも知れない。だが、ウォライタ語にはごく少数とはいえ、n 音を喉頭化した n 音で借用している例が見られる。この現象もまた、n 音は何かの点でウォライタ語では特殊な音であることを示唆している可能性がある。

別紙

当報告の内容は、それぞれの著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

「アフリカ諸語の情報構造と言語形式の類型論的研究」共催：中野教授追悼セム語研究集会

日時：2013年2013年7月7日（日）10:30 - 18:00

場所：AA 研マルチメディア会議室(304)

報告者：セイフ・ラナ（東京外国語大学大学院 博士前期課程）

／松尾 愛（東京外国語大学大学院 博士前期課程）

報告タイトル

「アラビア語の派生形第 VII 形と第 VIII 形の使い分け—コーランテキストを対象とした分析から—」

本発表の目的は、コーランテキストを対象にアラビア語¹の派生形第 VII 形および第 VIII 形の動詞（動名詞や分詞の形でもちいられているものについては本発表では分析の対象としない）の使用例を抽出し、その使用にどのような違いがみられるかについて明らかにすることである。

本発表で用いるコーランコーパスは The Quranic Arabic Corpus を使用した。Quran Dictionary の Morphological Search の項から、Verb \ Form VII/VIII を条件に検索を行った。

VII 形抽出結果と分析

Verb \ Form VII の条件で抽出された VII 形の動詞は 51 個（異なり語数 15 個）であった。VII 形の 51 個のすべては自動詞である。それを以下のような表 1 で示す。

表 1：主語による VII 形の分類

	動詞	用例数	意味	[[Animate=Human]]	[[ConcreteThing]]	[[Abstract Thing]]
1	inqalaba	18	turn back/retrun to	14	0	1
2	inǝʕalaqa	9	proceed/go forth	8	0	1
3	inbayaa	6	be appropriate	0	0	6
4	infaqqqa	5	split	0	5	0
5	infadʕdʕa	3	be dispersed /rush to	3	0	0
6	insalaxa	2	be detached/pass	1	0	1
7	inbaʕaθa	1	send forth	1	0	0
8	infadzara	1	gush	0	1	0
9	insʕarafa	1	turn away	1	0	0
10	infatʕara	1	cleft asunder	0	1	0
11	inbadzasa	1	gush forth	0	1	0

¹ 本発表でのアラビア文字の転写は以下の通りである。

字母	أ	ب	ت	ث	ج	ح	خ	د	ذ	ر	ز	س	ش	ص	ض	ط	ظ	ع	غ	ف	ق	ك	ل	م	ه	و	ي
転写	ʔ	b	t	θ	dʒ	ħ	x	d	ð	r	z	s	ʃ	sʕ	dʕ	tʕ	ðʕ	ʕ	y	f	q	k	l	m	h	w	y

長母音の表記については、aa, ii, uu を、二重母音は ay, aw を用いることとする。

当報告の内容は、それぞれの著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

12	inhaara	1	collapse	0	1	0
13	inqad ^o d ^o a	1	collapse	0	1	0
14	inkadara	1	fall	0	1	0
15	infalaqa	1	to part	0	1	0

VII 形（inkadara を除いて）は I 形の自動詞化という機能を成し、二つに分類できる。①類は主語が動作主であり（6 個）、②類は主語が対象である（8 個）。

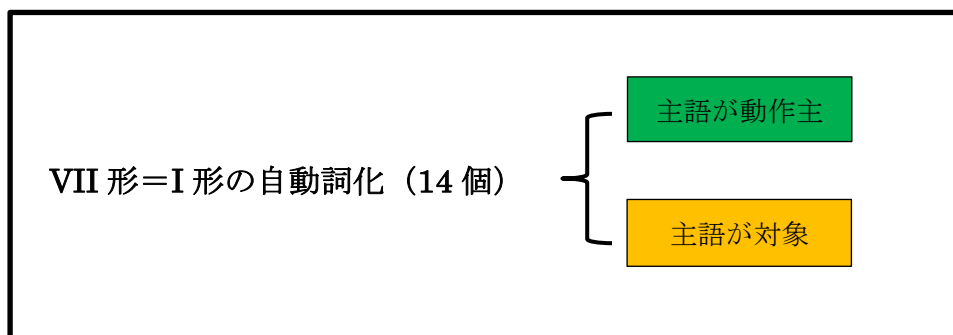


図 1: VII 形の機能

VIII 形の抽出結果と分析

Verb ^ Form VIII の条件で抽出された VIII 形の動詞は 963 個（異なり語数 101 個）であった。図 2 に示したように、I 形から派生した VIII 形には 4 つのタイプが存在した。I 形が他動詞（2 項動詞）で VIII 形が自動詞（1 項動詞）になるタイプの動詞（①類）が 41 個、I 形が自動詞（1 項動詞）で VIII 形が他動詞（2 項動詞）になるタイプの動詞（②類）が 5 個、I 形が他動詞（2 項動詞）で VIII 形が他動詞（2 項 or 3 項動詞）になるタイプ（③類）の動詞が 43 個、I 形が自動詞（1 項動詞）で VIII 形が自動詞（1 項動詞）になるタイプ（④類）の動詞が 12 個抽出された。

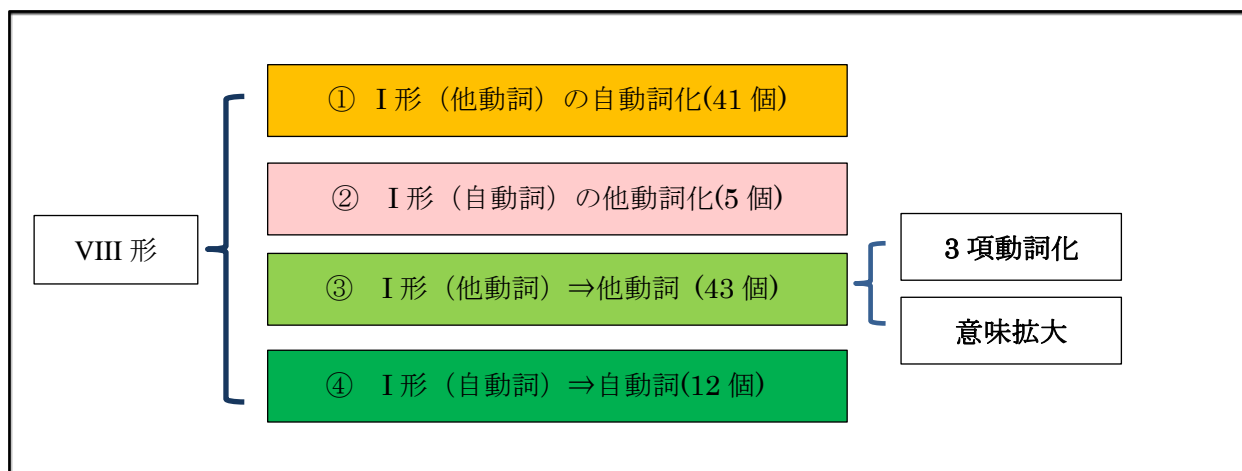


図 2: VIII 形の機能

別紙

当報告の内容は、それぞれの著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

I形が他動詞（2項動詞）でVIII形が自動詞（1項動詞）になるタイプの動詞（①類）の場合、VII形の動詞と項の減少という点では機能が共通している。ただし、VII形の形を持つ語根の場合、VII形=VIII形の同義とはならず、VIII形は他動詞（2項 or 3項動詞）である。

まとめ

- VII形とVIII形の共通点…I形（他動詞）の自動詞化（項の減少）
- VII形とVIII形の派生形をもつ動詞の場合
 - VII形=自動詞 VIII形=他動詞になる。
 - VII形=自動詞 VIII形=自動詞の場合、同義ではない
…(例) *inxas^{ʕama}*: be deducted / *ixtas^{ʕama}*: have a fight
- VIII形の動詞は自動詞化の他に、項の増加（3項動詞化）、意味の拡大（抽象化）が見られる。

研究会での質疑応答

Q:

VIII形の項の増減について多項動詞化と自動詞化が「同音異義」の *iftaʕala* 型で起きているとみなすことはないのか？

A.

これまで伝統的なアラビア語学の見地では「同音異義語」とみる立場はなかった。興味深い視点ではあると思う。

Comment. 朝鮮語のように一つの形態で複数の機能（使役・受動）を表すと考える立場もある。

ジュバ・アラビア語中層話体を記述する (Describing the ‘mesolect’ of Juba Arabic)

仲尾周一郎

南スーダン共和国で話されるアラビア語クレオールであるジュバ・アラビア語に関しては、1970–1980年代第二次内戦以前に行われた先行研究 (Mahmud 1979; Miller 1989, 2007; Miller & Abu-Manga 1992) により、「中層話体」的変種の存在が報告されてきた。Versteegh (1984, 1993) は Mahmud (1979) の報告に基づき、ジュバ・アラビア語が「脱クレオール化」の過程にあり、将来的には (スーダン共和国の口語レベルでの威信言語) スーダン・アラビア語へと吸収されうるとする仮説を提唱していた。

しかし、ジュバ・アラビア語中層話体についてはその後十分な報告がなく、脱クレオール化が進んでいるのか否か、種々の言語コミュニティで話される中層話体的特徴をもった変種が単一の言語変種がなすかどうかといった問題は十分な議論が行われてこなかった。

本発表では、発表者の調査に基づき、第二次内戦開始後にジュバ・アラビア語中層話体を獲得したと考えられる話者における中層話体的特徴を観察した。この結果、諸先行研究で述べられている音韻的・文法的特徴は、不安定ながらも (1人の話者の1発話内でもかなりの揺れが見られる)、ほぼそのまま保持されており、特に際立ってスーダン・アラビア語への言語移行が行われていないことが明らかとなった。

また、ジュバ・アラビア語中層話体には、ジュバ・アラビア語 (基層話体) にもスーダン・アラビア語にも見られない動詞形態論が発達していることを述べた。特に、動詞未完了 1人称単数・複数形式に見られる接頭辞 *n-* に関しては、スーダン西部で話されるアラビア語変種からの影響が疑われる。すなわち、中層話体の発達は単にスーダン・アラビア語を目標言語とする言語変化ではないと結論付けることができる。

さらに、上記の中層話体に特徴的な動詞形態論は、内戦期にハルツームに在住した経験を持つ話者、ジュバ生え抜きの話者、南スーダン北部出身の話者のいずれにも共通して観察される。すなわち、この基準をもって「中層話体」を規定できる可能性が指摘できる。

現時点ではデータの不足のため、中層話体的特徴がどのような時期に出現し、どのような経路により拡大するに至ったかに関しては十分に議論することができない。また、特に南スーダン北部 (バハル・エル・ガザル地域や上ナイル地域) における中層話体に関するデータは不足しており、今後調査の調査により、これを補足したい。

Mahmud, Ushari. 1979. *Linguistic Variation and Change in the Aspectual System of Juba Arabic*. Georgetown University: Ph.D. thesis.

Miller, Catherine & Al-Amin Abu-Manga. 1992. *Language Change and National Integration: Rural Migrants in Khartoum*. Khartoum: Khartoum University Press.

- Miller, Catherine. 1989. Kelem Kalam Bitak: Langues et Tribunaux en Equatoria. *Matériaux Arabes et Sudarabiques* 2. pp. 23–58.
- Miller, Catherine. 2007. Do They Speak the Same Language? Language Use in Juba Local Courts. In Everhard Ditters and Harald Motzki (eds.) *Approaches to Arabic Linguistics: Presented to Kees Versteegh on the occasion of his sixtieth birthday*. Leiden: Brill. pp.607–638.
- Versteegh, Kees. 1984. *Pidginization and Creolization: The Case of Arabic*. Amsterdam: John Benjamins.
- Versteegh, Kees. 1993. Leveling in the Sudan: From Arabic Creole to Arabic Dialect. *International Journal of the Sociology of Language* 99. pp. 65–79.